

女子大学生における親準備性の発達 (1) —入学時のソーシャルスキルについて—

井森 澄江*, 岩治 まとか**

(平成21年9月30日受理)

Development of Readiness for Parenthood in Students of a Woman's University (1)

Examination of the Social Skills of Students of Just Entering the University

IMORI, Sumie and IWAJI, Madoka

(Received on September 30, 2009)

キーワード：女子大学生, 親準備性, ソーシャルスキル, アタッチメント

Key words: Students of a Woman's University, Readiness for Parenthood, Social Skills, Attachment

要旨

本研究は大学で学ぶ4年間で、青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのかを明らかにしようとするものである。大学に入学した1年生が4年になるまで質問紙調査を実施、その成長を追跡していく。本報告では、大学に入学した直後の女子大学生の、幼児期、中学高校期そして現在の愛着関係および現在のソーシャルスキルについて検討する。

対象は95名の女子大学生。愛着（就学前、中学高校期IPA、現在IWM）、養護性、ソーシャルスキルに関する項目からなる質問紙調査を実施した。

その結果①現在の愛着に関して、アンビバレント得点が最も高く、2年生に比べて、安定がやや低く、アンビバレント傾向にあることが示された。②ソーシャルスキルについては2~4年生（男女）に比べて、主張性がやや低かった。③ソーシャルスキルと現在の愛着IWM安定に強い正の相関（ $r = .80$ ）がみられた。また、就学前安定（ $r = .37$ ）とも正の相関が認められた。逆にIWM愛着アンビバレント（ $r = -.50$ ）とは中程度の負の相関が、IWM回避（ $r = -.25$ ）、中高校期のIPA疎外（ $r = -.21$ ）とは弱い負の相関があった。愛着の安定性がソーシャルスキルのベースになっていることが示唆された。

問題と目的

本研究は大学で学ぶ4年間で、今日の青年女子がどのように「保護される立場」から「保護する立場」に成長していくのか、どうやって「保護する立場」に必要な力を身につけていくのかを明らかにしようとするものである。大学に入学した1年生が4年になるまで毎年4月に（また4年次には卒業時も）質問紙調査を実施、その成長を追跡していく。本報告では、大学に入学した直後の女子大学生の、幼児期、中学高校期そして現在の親を中心とした愛着関係のあり方および現在のソーシャルスキルや養護性について検討する。報告(1)では主に、入学した直後の女子大学生のソーシャルスキルについて、幼児期から大学生になった現在までの愛着関係のあり方との関連から検討していく。

これまで、大学生の養護性、乳幼児期から大学期・成人期の親との関係について我々はいくつかの研究を行ってきた（井森ら2004,2006,2008等）。また、養護性の測定、親子関係の測定についても検討してきた（岩治2005,井上ら2006等）。それらは、ある意味、(具体的状況を問う質問は含まれているものの)感情のレベルを主としたものといえる。

「保護する立場」ととれるか否かという場合、感情・気持ちをこえて、具体的な行動ができるかということが重要になってくる。つまり、ソーシャルスキルを持ち、それを適切に使うことができるかが問題となる。本研究では養護性という概念のみでなくソーシャルスキルという概念を軸として「保護される立場」から「保護する立場」に成長していく過程を検討していく。ここでは、まず、ソーシャル

* 人文学部発達心理研究室

** 人文学部教育福祉学科・心理教育学科資料室

キルという概念とその測定について触れておく。

ソーシャルスキル (Social skills) に関しては、①包括的な概念であり、複雑で豊富な内容をもつこと、②異なる分野 (例えば、教育学、医学、心理学) の研究者が異なる目的やコンテキストの中で研究を進めてきたこと、③ソーシャルスキルが他者との相互作用にかかわるために、どのような場面を設定するか (例: 初対面, 対人葛藤を解決する場面) によっても定義が変わってくることなどにより、その定義にいまだに統一的なものはない (相川, 2000)。(なお、従来の諸定義に関しては、杉村ら (2007) により次のようにまとめられている。Riggio (1986): 基本的な情報の発信と受信がソーシャルスキルの鍵である。認知的能力 (対人的問題解決スキルなど) は付加的なものである。Foster, Inderbitzen, & Nangle (1993): ある特定の場面で、短期・長期的に、その子どもと周りの人間にとってポジティブな結果をもたらすと同時にネガティブな結果を最小にする行動。Darden & Ginter (1996): 「ソーシャルスキルのある人」= ある特定のスキルを持っていて、それらのスキルをどこでいつ使うかを知っている人。Segrin (1998): 他者と、適切な方法で効果的に接することを可能にするスキルや能力。相川 (2005): 対人関係の目標を達するために、言語的・非言語的な対人行動を適切かつ効果的に実行する能力。)

庄司 (1991) は、先行研究における定義をまとめ、ソーシャル (社会的) スキルの概念には、①学習される、②対人関係の中で展開される、③個人の目標達成に有効である、④社会的に受容され価値あるものである、という捉え方が含まれなければならないと述べている。また、相川ら (2005) は、従来の諸定義を吟味し、ソーシャルスキルとは①具体的な対人場面で用いられるもの、②対人目標を達成するために使われるもの (対人目標とは、当該の対人場面から手に入れたいと思う成果のことである)、③相手の反応の解釈や、対人目標の決定感情の統制などのような「認知過程」と、対人反応の実行という「行動過程」の両方を含むもの、④言語的ないしは非言語的な対人反応として実行されるもの、⑤学習によって獲得されたもの、⑥自分の対人反応と他者の反応とをフィードバック情報として取り入れて、変容してゆくもの、⑦不慣れな社会的状況では意識的に実行されるが、熟知した状況では自動化しているもの、などの要素を含んだものであると言えよう述べている。

これまで多くの研究で、ソーシャルスキルと精神的適応が関連することが示されており、ソーシャルスキルの使用頻度が低いことまたはその欠如はさまざまな社会的不適応につながりやすく、ソーシャルスキルはわれわれの良好な社会生活に欠くことができないものであると考えられている (庄司, 1994; 石井, 2007)。このため、集団にうまく

適応できない、仲間から受容されない子どもたちのソーシャルスキルを発達させるプログラムの開発が1970年代、行動主義の心理学者たちにより盛んに行われた (Keller & Carson, 1974; 井森 1997 年より)。ソーシャルスキルの研究は、社会的適応に問題をもつ人に対する治療と訓練から発達した (庄司 1994)。

しかし、今日、ソーシャルスキルは単に、特定の人だけでなく、小学生、中学生・高校生、大学生、社会人の多くの人にとっての学習課題となっている。それにともない、さまざまなスキル測定-面接法、行動観察法、ロールプレイ法、友人による評定、親や教師による評定、自己評定等-が試行されてきた。これらのうち、思春期以降の測定に関しては、対人関係が複雑化することによる親や教師による評定の妥当性の問題や、面接法、行動観察法、ロールプレイ法のもつ時間的制約、標準化の難しさという問題もあって、自己評定法が実際のとみなされ、成人用に限りてもかなりの尺度が開発されてきた (SSI; Riggio (1986), ENDL1; 堀尾 (1991), ENDL2; 堀尾 (1994), ノンバーバルスキル尺度; 和田 (1992), KiSS-18; 菊池 (1988), ソーシャルスキル尺度; 和田 (1992))。これらはコミュニケーションスキルを測るタイプと対人スキルを測るタイプに分類できる。

相川ら (2005) は、ソーシャルスキルという概念が包括的であることを考えて、コミュニケーションスキルと対人スキルの2側面から同時にソーシャルスキルを測定できる尺度の開発を目指し、コミュニケーションスキルとして「記号化」「解読」「感情統制」の3つを仮定し、対人スキルとして「関係開始」「関係維持」「主張性」「葛藤解決」「状況モニタリング」の5つを仮定した上で、各スキルごと6~8項目ずつを作成、計55項目からなる原尺度を作成した。これを教員養成系大学の2~4年生に実施、1002名 (男性435名、女性567名) を分析対象とし、G-P分析、因子分析により35項目を選択、6因子が抽出されたことから、これら6つの下位尺度からなる「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度 (Social skills self-rating scale for adult)」を構成した。この尺度は「対人不安尺度」「孤独感尺度」「抑うつ尺度」と予想通りの相関関係が認められ、再検査法によって安定性も確認されている。(ただし、6つの下位尺度のうち「感情統制」は他の尺度と比べて、「対人不安」「抑うつ」との相関が弱い。尺度全体とも相関が低い ($r=.18$)。「記号化」とは負の相関関係 ($r=-.31$) にあったことなどから、ソーシャルスキル得点をだすときには下位尺度同士の得点を単純に合計することは避けなければならない。「感情統制」尺度の項目を除いた5つの下位尺度で、合計点を算出する方法も採用してよいかもしれない、というソーシャルスキル得点算出に対しての但し書きがつけられている。)

本報告におけるソーシャルスキルの概念定義は相川 (1996, 2000), 相川ら (2005) に沿うものとする。また, その測定において「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度 (Social skills self-rating scale for adult)」相川ら (2005) を用いる。

本報告 (1) の具体的目的は 以下の通りである。

- ①入学当初の女子大学生のソーシャルスキルを測定し, その特徴を捉える。
- ②これまでの愛着関係 (幼児期における親との関係, 中学高校時代の親との関係の認知, 現在の対人関係, 愛着) を測定し, 幼児期, 中学高校期, 大学入学時 (現在) の対人関係, 対人経験, 対人感情を捉える。
- ③入学当初の女子大学生のソーシャルスキルとこれまでの愛着関係の関連について検討する。

方法

1. 対象者

首都圏のA女子大学1年生95名 (すべてこの研究の対象者になることを同意) 年齢18~19歳

2. 実施時期: 2009年4月上旬

3. 実施方法

入学直後のオリエンテーションの最後に調査への協力を依頼し, 質問紙を配布した。その場で回答し (回答時間は20分程度), 回答終了後, 質問紙は各自回答箱に投函してもらった。

4. 質問紙項目

(1) フェイスシート (学籍番号, 年齢, 家族構成, 育った環境, 母親の就労状況, 年下の子どもの世話経験など)

(2) 文章完成を求める項目

私にとって母とは (父とは, 友だちとは, 尊敬する人とは) に続く文章を各3つずつ作ってもらう。

(3) 愛着に関する質問項目

①就学前の母子関係に関する項目: 酒井 (2001) の就学前の母子関係尺度16項目のうちの9項目 (就学前の安定的な母子関係尺度3項目, 就学前の拒否的な母子関係尺度3項目, 就学前のアンビバレントな母子関係尺度3項目) を用いた。

②中学高校時代の親との関係に関する項目: 井上ら (2006) のIPA (Inventory of Parent Attachment) 18項目 (信頼尺度6項目, コミュニケーション尺度6項目, 疎外尺

度6項目からなる) を用いた。

③現在の愛着に関する項目: 戸田 (1988) の内的作業モデル (IWM) 尺度18項目 (安定尺度6項目, アンビバレント尺度6項目, 回避尺度6項目からなる) を用いた。

①②③計45項目, 各項目について, 「1. 全くそう思わない」から「4. 非常にそう思う」までの4段階で評定してもらった。

(4) 養護性に関する質問項目

岩治 (2004) の養護性尺度46項目 (子ども・赤ちゃんへの関心尺度17項目, 親に対するポジティブな感情尺度10項目, 親になることへの積極的志向尺度5項目, 奉仕的な志向尺度5項目, 将来の子育てに対するネガティブな予測尺度4項目, 動植物への関心尺度5項目からなる) を用いた。

各項目について, 「1. 全くそう思わない」から「4. 非常にそう思う」までの4段階で評定してもらった。

(5) ソーシャルスキルに関する質問項目

相川ら (2005) の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度35項目 (関係開始尺度8項目, 解読尺度8項目, 主張性尺度7項目, 感情統制尺度4項目, 関係維持尺度4項目, 記号化尺度4項目からなる) を用いた。各項目について, 「1. ほとんどあてはまらない」から「4. かなりあてはまる」までの4段階で評定してもらった。

回答結果は, ソーシャルスキルが高いほど高得点になるよう1点から4点に得点化した。

結果と考察

本報告では, 質問紙への各尺度にすべて回答していた90名を分析対象者とした。

1. 入学時点におけるソーシャルスキル

今回用いた成人用ソーシャルスキル自己評定尺度 (2005) は6つの下位尺度からなる。今回の各下位尺度得点の平均値を, 相川ら (2005) の大学2年生以上 (1002名男性435名, 女性567名) の値と比較できるように表1に示した。

関係開始尺度の項目 (「相手とすぐにうちとけられる」「誰とでもすぐ仲良くなれる」など) 平均値は2.49, 解読尺度の項目 (「表情やしぐさで相手の思っていることがわかる」「話をしているとき, 相手の表情のわずかな変化も感じとれる」など) 平均値は2.68, 主張性尺度の項目 (「自分が不愉快な思いをさせられたときは, はっきりと苦情をいう」「友だちが自分の気持ちを傷つけたら, そのことをはっきりと伝える」など) 平均値は2.30, 感情統制尺度の項目 (「気持ちをおさえようとしても, それが顔にあ

表1 ソーシャルスキル下位尺度平均値

ソーシャルスキル 下位尺度	今回 尺度平均値 (SD)	今回 項目平均値 (SD)	2005 尺度平均値 (SD)	2005 項目平均値
関係開始：8項目	19.93 (5.25)	2.49 (.45)	19.84 (5.10)	2.48
解説：8項目	21.45 (3.26)	2.68 (.41)	21.75 (4.16)	2.72
主張性：7項目	16.11 (3.68)	2.30 (.53)	17.34 (3.42)	2.48
感情統制：4項目	9.49 (2.52)	2.37 (.63)	9.13 (2.66)	2.29
関係維持：4項目	11.69 (1.62)	2.92 (.40)	11.55 (2.00)	2.89
記号化：4項目	11.78 (2.52)	2.94 (.63)	11.46 (2.41)	2.89

らわれてしまう」(逆転項目)「困った時は顔にしやすい」(逆転項目)など)平均値は2.37, 関係維持尺度の項目(「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」など)平均値は2.92, 記号化尺度の項目(「表情が豊かである」「身振り手振りをまじえて話すのが得意である」など)平均値は2.94であった。

すでにできあがっている対人関係を維持するのに必要な「関係維持」スキル, 個人が相手に自らの意思を伝えるために行う「記号化(エンコーディング)」に関わるスキル得点は2.9台とやや高く, 一方, 相手の意思を尊重しながらも, 自分の意思を抑えることなく相手に伝える「主張性」スキル, コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するための「感情統制」に関するスキル得点は2.3台とやや低かった。

今回の女子大学1年生の入学時点におけるソーシャルスキル得点(5下位尺度合計)の平均値は80.96(6下位尺度合計90.45)であった。相川ら(2005)の大学2~4年生のソーシャルスキル得点(5下位尺度合計)の平均値は81.94(6下位尺度合計91.09)である。これは, 相川ら(2005)の値に比べて, 「自分が不愉快な思いをさせられたときには, はっきりと苦情を言う」などの項目からなる主張性尺度得点がやや低い(今回16.11, 相川ら(2005)17.34)ことが, ソーシャルスキル得点に反映された結果といえる。主張性以外の下位尺度において差は見られなかった。今回の女子大学1年生のソーシャルスキルは教職を目指す2~4年の大学生と比べて, 主張性はやや低い(それ以外(関係開始, 解説, 関係維持, 記号化)はほぼ等しかった。これは, 今回の対象が1年生ではあるが, 女性であることが関係しているのかもしれない。

2. これまでの対人関係のあり方

今回用いた, 幼児期の母子関係をみる就学前の母子関係尺度(安定的な母子関係尺度3項目, 拒否的な母子関係尺度3項目, アンビバレントな母子関係尺度3項目の計9項目からなる), 青年期の親子関係を見るIPA (Inventory of Parent Attachment) (信頼尺度6項目, コミュニケーション尺度6項目, 疎外尺度6項目の計18項目からなる)現在

表2 愛着下位尺度平均値

愛着下位尺度	項目平均値	S D
就学前(母子)安定	3.09	.64
就学前(母子)拒否	1.59	.65
就学前(母子)アンビバレント	2.09	.70
中高校期(IPA)信頼	3.16	.62
中高校期(IPA)コミュニケーション	2.53	.65
中高校期(IPA)疎外	2.59	.65
現在(IWM)安定	2.48	.54
現在(IWM)回避	2.09	.45
現在(IWM)アンビバレント	2.76	.52

の愛着に関する内的作業モデル(IWM)尺度(安定尺度6項目, アンビバレント尺度6項目, 回避尺度6項目の計18項目からなる)の各下位尺度の項目平均得点を表2に示した。

就学前の母子関係では安定的な母子関係尺度項目(幼い頃, 母親と出かけるのが楽しかった等)平均が3.09と最も高く, アンビバレント項目(幼い頃, 親戚の家に遊びに行っても, 親がいないと怖かった等)平均が2.09, 拒否的な母子関係尺度項目(幼い頃, 私はいつか見捨てられるのではないかと思った等)平均が1.59と最も低かった。中高校期の親子関係を見るIPAでは信頼尺度項目(両親は私の判断を信用してくれた, 私の両親は私の気持ちを大事にしてくれていた等)平均が3.16と最も高かったが, つぎに疎外尺度項目(両親が察しているより私のイライラは激しいものだった, 誰を頼ればよいのかわからない時期があった等)平均が2.59, そして, コミュニケーション尺度項目(私は両親に自分の悩み事や問題を話していた, 私に何か悩み事があると両親はすぐ察しがついたようだ等)平均が2.53であった。

現在すなわち大学1年入学時の愛着に関するIWM尺度では, アンビバレント尺度項目(人は本当は嫌々ながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある等)の平均が2.76と最も高く, 安定尺度項目(大抵の人は私を好いてくれていると思う等)は2.48, 回避尺度項目(人と親しくなるのは好きではない等)は2.09であった。

就学前では安定尺度項目が3.00を超え最も高い, 中高校期も信頼尺度項目が3.00を超えて最も高いが, 大学1年入

学時ではアンビバレント尺度項目が最も高くなっている。

同じ就学前の母子関係尺度, IWM尺度を6段階評定で2年生に実施した岩治ら(2008)では, 安定的な母子関係尺度項目平均が5.07と最も高く, アンビバレント項目が3.00, 拒否的な母子関係尺度項目が2.14と最も低かった。また, 現在IWM尺度では, 安定尺度項目の平均が3.69と最も高く, アンビバレント尺度項目は3.57, 回避尺度項目は2.68であった。

このことから, 今回の大学1年入学時の愛着に関するIWM尺度の下位尺度得点には, 大学入学という大きなライフイベントを経験している最中で, 環境に十分に適応していないことが影響していると考えられる。また, IWM尺度は親子関係ではなく対人関係に関する項目からなっていることも関連していると思われる。ただ, 今回の対象者の特徴ということもありえるかもしれない。このことについては今後の追跡調査でさらに検討していく。

3. これまでの対人関係のあり方とソーシャルスキル

ソーシャルスキルの6つの下位尺度と就学前母子関係尺度, 中高校期のIPA尺度, 現在のIWM尺度の各下位尺度得点の相関係数を算出し, 表3に示した。

ソーシャルスキル下位尺度のうち「感情統制」スキル尺度は, 他の下位尺度がすべて正相関 ($r = .30 \sim r = .81$) を示すIWM安定と相関がない ($r = .01$) ばかりか, IPAコミュニケーション ($r = -.27$) と負の相関関係にある。またIPA信頼とは $r = -.11$, 就学前安定とは $r = -.01$ である。この「感情統制」スキル尺度は相川ら(2005)においては尺度全体とも ($r = .18$) 「解読」とも ($r = .10$) 相関が低く「関係開始」($r = -.08$) 「主張性」($r = -.07$) 「記号化」($r = -.31$) とは負の相関関係にあった。また, 「対人不安」, 「抑うつ」両尺度との相関も弱かった。このことから相川ら(2005)は「感情統制」スキル尺度は他の下位尺度とは異質であり, ソーシャルスキル得点として, この「感情統制」尺度を除いた5つの下位尺度の合計点を採用する可能性についても述べている。そこで, 今回は(「感情統制」が「愛着」尺度との相関において他の下位尺度と異なる傾向を示していることから), ソーシャル

スキル尺度得点として「感情統制」を除く5つの下位尺度の合計点を用いる。このソーシャルスキル尺度得点と就学前母子関係尺度, 中高校期のIPA尺度, 現在のIWM尺度の各下位尺度得点の相関係数も表3に示した。

ソーシャルスキルと現在のIWM安定に強い正の相関 ($r = .796$) がみられた。また就学前安定とも弱い正の相関 ($r = .372$) が認められた。逆にIWMアンビバレントとは中程度の負の相関 ($r = -.495$) があった。現在のIWM回避 ($r = -.253$), 中高校期のIPA疎外 ($r = -.211$) とも弱い負の相関があった。

感情統制(コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するためのスキル)を除いた5つの各下位尺度においても現在のIWM安定と正の相関(「関係開始」($r = .812$), 「解読」($r = .431$), 「主張性」($r = .615$), 「関係維持」($r = .303$), 「記号化」($r = .575$))があった。また, 現在のIWMアンビバレントとは負の相関(「関係開始」($r = -.405$), 「解読」($r = -.219$), 「主張性」($r = -.585$), 「関係維持」($r = -.359$), 「記号化」($r = -.224$))が認められた。

また, 関係開始(初対面の人同士がであったときに必要なスキル), 記号化(個人が相手に自らの意思を伝えるために行うエンコーディングにかかわるスキル)については現在のIWM回避と弱い負の相関(「関係開始」($r = -.330$) 「記号化」($r = -.269$))があった。

感情統制と主張性(相手の意思を尊重しながらも, 自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキル)を除いた各下位尺度と就学前安定に弱い正の相関(「関係開始」($r = .348$) 「解読」($r = .234$) 「関係維持」($r = .283$) 「記号化」($r = .326$))があった。主張性と就学前安定とは $r = .203$ であったが, 感情統制と就学前安定とは $r = -.011$ であった。感情統制が異質の尺度であることがうかがえる。

ソーシャルスキルと中高校期のIPA信頼 ($r = .183$) とは相関はなかった。「記号化」(「表情が豊かである」「身振り手振りをまじえて話すのが得意である」など)と中高校期のIPAコミュニケーションとは弱い正の相関 ($r = .219$), 中高校期のIPA疎外とは弱い負相関 ($r = -.283$) が認められた。主張性(「自分が不愉快な思いを

表3 ソーシャルスキル尺度と愛着尺度の相関

	就学前安定	就学前回避	就学前アンビ	中高校信頼	中高校コミュ	中高校疎外	現在安定	現在回避	現在アンビ
関係開始	.348**	-.239*	-.101	.125	.135	-.186	.812**	-.330**	-.405**
解読	.234*	-.039	.157	.066	.149	.055	.431**	-.008	-.219*
主張性	.203	-.055	-.226*	.184	.105	-.207*	.615**	-.135	-.585**
感情統制	-.011	-.027	-.074	-.111	-.268*	.026	.014	.172	-.133
関係維持	.283*	-.180	-.006	.170	.103	-.209*	.303**	-.121	-.359**
記号化	.326**	-.152	-.069	.180	.219*	-.283**	.575**	-.269*	-.224*
ソーシャルスキル*	.372**	-.182	-.083	.183	.185	-.211*	.796**	-.253*	-.495**

*感情統制を除いた5つの下位尺度得点の合計点をソーシャルスキル得点とした ** $p < .01$ * $p < .05$

させられたときは、はっきりと苦情をいう」「友だちが自分の気持ちを傷つけたら、そのことをはっきりと伝える」など、相手の意思を尊重しながらも、自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキル)、関係維持(「相手の立場を考えて行動する」「その場にあった行動がとれる」など、すでにできあがっている対人関係を維持するのに必要なスキル)にも中高校期のIPA疎外と弱い負相関(「主張性」($r = -.207$)「関係維持」($r = -.209$))があった。

愛着の安定性がソーシャルスキルのベースになっていることが示唆された。ただし、中高校期の信頼に関しては、養護性の親に対するポジティブな感情($r = .67$)と相関があった(岩治ら2010)もののソーシャルスキル($r = .18$)とは相関が示されなかった。また、現在のIWM安定と就学前安定には正の相関($r = .28$)がみられたが、中高校期の信頼とは現在および就学前安定とも相関は示されなかった(IWM安定とは $r = .19$ 、就学前安定とは $r = .13$)。

中高校期の愛着関係に関しては親との関係より仲間(peer)との関係が、ソーシャルスキルと関連するかもしれない。これに関しては今後の課題としたい。

まとめ

①大学入学直後の愛着IWMに関してはアンビバレント得点が最も高く、大学2年生(女子)のデータに比較して、安定がやや低く、アンビバレント傾向にあることが示された。IWM尺度は親子関係ではなく対人関係に関する項目からなっていることを考えると、この結果には、大学入学という大きなライフイベントを経験している最中で、環境に十分に適応していないことが影響していると思われる。ただ、今回の対象者の特徴ということもありえるかもしれない。このことについては今後の追跡調査でさらに検討していく。

②ソーシャルスキルに関しては大学2~4年生(男女)のデータに比較して主張性はやや低いとそれ以外(関係開始、解読、関係維持、記号化)はほぼ等しかった。これは、今回の対象が1年生ではあるが、女性であることが関係しているのかもしれない。

③ソーシャルスキルと現在のIWM安定($r = .80$)に強い正の相関がみられた。また、就学前安定($r = .37$)とも弱い正の相関が認められた。逆にIWMアンビバレント($r = -.50$)とは中程度の負の相関が、IWM回避($r = -.25$)、中高校期のIPA疎外($r = -.21$)とは弱い負の相関があった。愛着の安定性がソーシャルスキルのベースになっていることが示唆された。ただ、ソーシャルスキルと中高校期のIPA信頼とは相関はなかった。

ソーシャルスキルの下位尺度に関しても感情統制(コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するためのスキル)を除いた5つの各下位尺度においてIWM安定と正の相関、IWMアンビバレントとは負の相関が認められた。また、関係開始(初対面の人同士がであったときに必要なスキル)、記号化(個人が相手に自らの意思を伝えるために行うエンコーディングにかかわるスキル)についてはIWM回避と弱い負の相関があった。感情統制と主張性(相手の意思を尊重しながらも、自分の意思を抑えることなく相手に伝えるスキル)を除いた各下位尺度と就学前安定に正の相関があった。

ソーシャルスキルと中高校期のIPA信頼とは相関はなかったが、記号化とIPAコミュニケーションとは弱い正の相関、IPA疎外とは弱い負相関が認められた。主張性、関係維持(すでにできあがっている対人関係を維持するのに必要なスキル)にもIPA疎外と弱い負相関があった。

付記

本研究の調査に協力して下さいました一年生諸姉に感謝いたします。

引用参考文献

- 相川充 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充(編)社会的スキルと対人関係：自己表現を援助する誠信書房 3-21 1996
- 相川充 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学 サイエンス社 2000
- 相川充 ソーシャルスキル測定についての課題と展望 東京大学大学院教育学研究科教育研究創発機構教育測定・カリキュラム開発講座 2005年度研究活動報告書(1) 27-46 2005a
- 相川充 社会的スキルの国際比較は可能か 菊池章夫(編著)社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック 川島書店 166-172 2007.
- 相川充・藤田正美 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要1部門56 87-93 2005 b
- Darden, C. A., & Ginter, E. J. Life-skills development scale -- adolescent form: The theoretical and therapeutic relevance of life-skills. *Journal of Mental Health Counseling*, 18, 142-163 1996
- Foster, S. L., Inderbitzen, H. M., & Nangle, D. W. Assessing acceptance and social skills with peers in childhood --- Current issues. *Behavior Modification*, 17,

- 255-286 1993
- 堀毛一也 社会的スキルとしての思いやり 現代のエスプリ, 291, 150-160 1991
- 堀毛一也 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也 (編) 社会的スキルの心理学 168-176 川島書店 1994
- 井森澄江 仲間関係の発達 井上健二・久保ゆかり (編) 子どもの社会的発達 50-69 東京大学出版会 1997
- 井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子 青年期女子の養護性の発達 (1) 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 376 2004
- 井森澄江・大井京子 養護性と親子関係 I 東京家政大学附属臨床相談センター紀要第六集 2006
- 井森澄江・岩治まとか 女子青年における“乳幼児期から現在までの親との関係”と“養護性”一回顧法による生育史の分析をもちいて—東京家政大学附属臨床相談センター紀要第八集 2008
- 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江 親子関係の生涯発達心理学的研究 II - PBIとIPAの尺度の再検討 - 東京家政大学研究紀要第46集 2006
- 岩治まとか 青年期における養護性の検討 東京家政大学大学院文学研究科修士論文 2005
- 岩治まとか・井森澄江 女子大学生における親準備性の発達 (2)—入学時の養護性について—東京家政大学研究紀要第50集 2010
- Keller, M. & Carlson, P. The use of symbolic modeling to promote social skill in preschool children with low levels of social responsiveness. *Child Development*, 45, 912-919 1974
- Riggio, R. E. Assessment of basic social skills. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55(1), 649-660 1986
- 酒井厚 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9, 59-70 2001
- Segrin, C. The impact of assessment procedures on the relationship between paper and pencil and behavioral indicators of social skill. *Journal of Nonverbal Behavior*, 22 (4), 229-251 1998
- 庄司一子 社会的スキルの尺度の検討—信頼性・妥当性について—教育相談研究 29, 18-25 1991
- 庄司一子 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也 (編者) 社会的スキルの心理学 201-218 1994
- 杉村仁和子・石井秀宗・張一平・渡部洋 児童生徒用ソーシャルスキル尺度 (SSI-M) 開発研究報告書 2007
- 詫摩武俊・戸田弘二 愛着理論から見た青年の対人態度：成人愛着スタイル尺度作の試み, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16 1988
- Trower, P. Toward a generative model of social skills: a critique and synthesis. In J. P. Curren & P. M. Monti (Eds), *Social skills training: A practical handbook for assessment and treatment*. New York: Guilford Press. 399-427 1982
- 和田実 対人的有能性に関する研究—ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成—実験社会心理学研究 31, 45-59 1991
- 和田実 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要 1 部門 43, 123-136 1992

Abstract

The study intends to clarify how adolescent girls grow out of being under protection, gaining protecting capability. The growth is traced by a series of questionnaire surveys beginning with freshmen and continuing until they graduate from the university. The report surveys attachment and social skills of female students just entering the university. The subjects of the survey were 95 female students of a woman's university, and a questionnaire sheet covered items of preschool mother-child attachment, attachment to parents in adolescence (IPA scale) and the present attachment (IWM scale), items of nurturance and items of social skills.

We found the present attachment of the subjects, making a high score in ambivalence and slightly less stable compared with a second-year students, tended to be ambivalent. The social skills of the subjects were slightly lower low in assertion than those of senior students. The social skills showed a strong positive correlation with the stability of the present attachment ($r=0.80$), and positively correlated with the preschool secure ($r=0.37$), while the social skills were negatively correlated with ambivalence of the present attachment ($r=-0.50$), with avoidance ($r=-0.25$), and with alienation ($r=-0.21$) of the adolescence attachment. The stability of attachment was suggested to be the ground of the social skills.